科研費

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 1 4 日現在

機関番号: 32606

研究種目: 基盤研究(C)(一般)

研究期間: 2019~2023

課題番号: 19K00685

研究課題名(和文)日英語における有標構文と文法体系の相関

研究課題名(英文)On the relation between marked constructions and grammatical systems in English and Japanese

研究代表者

今野 弘章 (Konno, Hiroaki)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号:80433639

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文): 日英語の有標現象を意味・語用論的に記述し、それらが示す特殊性に関して、両言語の文法体系を考慮に入れた原理的説明の可能性を探った。扱った現象は次の4つである。 非伝達的機能に特化した有標現象、 時制辞を欠く有標現象、 疑似目的語を含む有標現象、 格助詞「の」の語中挿入を含む有標現象。そして、これらの現象が示す意味・語用論的特殊性が、両言語の一般的文法特性によって動機付けられていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義 本研究には次の2点の学術的意義がある。 本研究では、これまで比較対象とされてきていない有標現象を比 較・対照する、あるいはこれまで記述されてきていない有標現象を記述する。この点で本研究は記述的意義を持 つ。 本研究は、単に有標現象の独自性を示すものと見なされがちな特殊性が、孤立したものではなく、所属言 語の文法体系に動機付けられている(場合がある)という、有標現象の研究に関する新たな視座を提供する。こ の点で本研究は方法論的意義を持つ。

研究成果の概要(英文): This study examined the following four bizarre constructions in English and Japanese from a semanticopragmatic perspective, and considered whether their idiosyncrasies can be motivated in a principled way: (i) constructions functionally specialized as non-communicative expressions; (ii) main clause phenomena without morphological tense; (iii) constructions with fake objects; and (iv) "discontinuous" lexical expressions in which the case particle NO occurs wordmedially. It showed that the semanticopragmatic peculiarities of these phenomena are motivated in light of the general grammatical properties of the two languages.

研究分野: 英語学

キーワード: 有標性 日英語対照 類型論 伝達性 時制 疑似目的語 類像性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等に ついては、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1.研究開始当初の背景

個別言語の一般的文法特性から逸脱しているという点で「有標」と考えられる現象(以下「有標現象」)は言語理論を構築する際に重要な役割を果たしてきた。

有標現象に対するこれまでのアプローチは、当該現象を研究対象に含めるか否かという点で、大きく二分できる。生成文法では、核と周辺の区別(Chomsky 1981)に基づき、有標現象は周辺部に属すものとされ、人間の言語能力を説明する一般理論を構築する際の分析対象からは除外されてきた。これは一般に有標現象を軽視する立場と受け取られているが、見方を変えれば、理論の説明対象を定める上で有標か否かという基準が重要な役割を果たすこと、すなわち有標現象の重要性を示唆していると考えることもできる。

そうしたアプローチに対し、動的文法理論(Kajita 1977) 構文文法(Fillmore, Kay and O'Connor 1988, Goldberg1995, 2006) 音韻・統語・意味の三部門並列モデル(Jackendoff 1997, Culicover and Jackendoff 2005)では、有標現象と無標現象は峻別できるものではないという立場から、有標現象も包括的に取り扱うことができる理論的枠組みが提案されてきた。語用論の分野においても、新グライス派の研究(Horn 1984, Levinson 2000, Huang 2015)により、有標現象は、対応する無標現象との関連で注目され、両現象の間に語用論的分業が見られることが指摘されてきた。

こうした有標現象をめぐる状況において、特に後者のタイプの研究では、一般に、有標現象の特殊性を指摘することに主眼が置かれ、その特殊性(個)とそれぞれの有標現象が所属する個別言語の文法体系(全体)との相関を探る研究は十分には行われていない(天野 2002, 2011)。

また、有標現象の研究とは独立に、日英語対照による類型論的研究により、両言語の文法体系や意味・語用論的傾向に関する差異が明らかにされてきた(影山 1996, Washio 1996, Talmy 2000,草山・一戸 2005,池上 2007等)。しかしながら、そうした類型論的差異は、当然のことながら、日英語において無標と考えられる現象を基に指摘されたものであり、有標現象との関連が議論されることは少ない(Hirose 2013, 2015)。

こうした状況から、(日英語に関する)有標現象の研究と類型論的研究を繋ぐ試みが不足して いるといえる。

2.研究の目的

本研究は、上述の隙間を埋めるべく、日英語における有標現象を特に意味・語用論的視座から記述し、それらに対し、両言語の文法体系を考慮に入れた原理的説明の可能性を探ること、日英語の有標現象が示す意味・語用論的特殊性と両言語の文法体系との相関を明らかにすることを目的としたものである。具体的には、以下の4点を明らかにすることを目的とした。

非伝達的機能に特化した構文に注目し、それらの構文が受ける使用場面上の制約と日英語がデフォルトで示す意味・語用論的傾向との相関関係を明らかにすること。

時制辞を欠いた構文に注目し、それらが示す時制解釈上の差と日英語の時制体系の差との 間の相関関係を明らかにすること。

と の観察を一般化し、その妥当性を検証すること。

有標構文の意味・語用論的特殊性を個別言語の文法体系一般と関連付けて捉えることが可能な文法モデルを考察すること。

3.研究の方法

研究代表者自身による日英語の有標現象の意味・語用論的特性の記述研究と、関連する日英語の文法体系の先行研究(場合によっては言語の一般的特性に関する先行研究)を突き合わせ、両者のつながりを考察するという方法で研究を行った。有標現象の記述研究で用いる言語データは、母語話者による内省判断とコーパスおよびインターネット検索によって収集した。

4. 研究成果

非伝達的機能に特化した有標現象と個別言語の文法体系との相関(2019年度)

研究代表者のこれまでの研究成果を応用し、非伝達的機能に特化した日英語の有標現象が、両言語が示す語用論的傾向とどのような相関を示すか考察した。対象とした構文は、日本語のイ落ち構文(例:これうまっ!(今野 2012))、英語の Mad Magazine 構文(例:Him wear a tuxedo?!(Akmajian 1984))、英語日記文における一人称主語省略(例:Do not even know where am meeting him(廣瀬 2006))である。それらの構文と「英語は伝達的表現を無標の表現レベルとするのに対し、日本語は非伝達的表現を無標の表現レベルとする」という、Hirose (2013, 2015)による日英語の意味・語用論的志向性との関連を考察した。その結果、同じ非伝達的表現であっても、所属言語が当該表現タイプをデフォルトのものとするか否かに応じ、使用場面上の制約の有無が異なるという見通しを改めて得た。この結果は、本研究開始前年度(2018 年度)に研究代表者が国際学会ワークショップで口頭発表した内容の妥当性を再確認するものであった。

時制辞を欠く有標現象と個別言語の文法体系との相関(2022, 2023年度)

日本語のイ落ち構文は時制解釈が瞬間的現在時に特化する。当該構文が時制辞の終止形活用語尾「い」を持たないことを考慮すると、これは不思議な振る舞いである。形式的に時制を持たないのだから、時制解釈が特化せずとも良いはずだからである。

イ落ち構文における時制解釈の選択は一般的観点から語用論に動機付けることができる。すなわち、文法的指定がない場合は、話者が常にそこに存在するという点で無標の時制解釈といえる瞬間的現在時が選択される(今野 2012)。

これは、代名詞と時制の類似性を指摘した Partee (1973)の見解を「裏側」から支持する。現在時解釈には持続的なものと瞬間的なものがある(中右 1994)が、イ落ち構文が受ける瞬間的現在時解釈は、表す時間領域が持続的現在時解釈よりも制限的であるという点で、よりinformative な現在時解釈だといえる。イ落ち構文におけるゼロ時制と瞬間的現在時解釈の対応は、ゼロ照応をはじめとする縮約形式がより informative な解釈を受けるという一般的傾向 (Levinson 1987)と合致し、ゼロ形という観点から代名詞と時制の並行性を示唆する。

イ落ち構文における時制解釈の特化は日本語の時制体系という個別言語的観点から語用論的に動機付けられる。日英語対照研究により、日本語の定形時制辞は直示性が低く、対照的に英語の定形時制辞は直示性が高いことが指摘されている(Ota 1972, Ogihara 1999, 樋口 2000, 和田 2001 など)。この日本語の特徴により、イ落ち構文における定形時制辞「い」の不在は、時制解釈における直示性の低さを否定し、語用論的に選択された、直示性の高い瞬間的現在時解釈への特化を妨げない。イ落ち構文における定形時制辞の欠如が示す直示性の高さは、日本語における定形時制辞の直示性の低さと反比例の関係にある。この成果は研究会で口頭発表した。

疑似目的語を含む有標現象と個別言語の文法体系との相関(2019-2021年度)

(動詞ではなく)構文によって認可される目的語(以下、「疑似目的語」)に注目し、疑似目的語が、英語だけでなく、日本語にも存在することを示す現象を記述・分析した。そして、日本語の疑似目的語が、結果構文など、従来、英語で疑似目的語が観察されてきたものとは異なる構文的環境に現れ、その環境が、Huang (2000)や池上 (2000)らによって指摘されてきた、日本語がデフォルトで示す性質と符合するという見通しを得た。この研究は当初の予定にはなかったものだが、疑似目的語が認可される構文的環境が日本語の基本的な文法的性質と相関するという点で、本研究の主眼である「有標構文の特殊性が日英語の文法体系とどのような相関関係にあるか」というテーマと深く関わる。

研究の具体的内容は以下の通りである。日本語の X ヲナニスル構文(例:親の形見を何してんだ!)は、統語的認可子を持たない「対象のヲ格」を含む。このヲ格は、なんらかの他動詞との主要部-補部関係によってではなく、当該構文の使用場面上の特性、特に眼前の事態から得られる情報によって、対象性が語用論的に保証されて認可される。これは、統語構造と語用論的情報が関連する度合いが高い(Huang 2000) イマ・ココと文法の関連が密接である(池上 2007)といった日本語の一般的性質と合致する。

さらに、日英語対照研究の観点から以下のことを明らかにした。X ヲナニスル構文に形式と機能の両面で類似した英語の表現に、WXDY 構文(Kay and Fillmore 1999)がある(例:What are you doing breaking my record?)。WXDY 構文では、X ヲナニスル構文と異なり、他動詞(先の例における下線部)抜きでの対格項の認可は観察されない。この結果は疑似目的語の認可について以下の意味合いを持つ。先行研究では、Washio (1997)をはじめとする結果構文の対照研究により、英語で疑似目的語の認可が可能な環境において、日本語ではそれが不可能なことが分かっている。日本語の X ヲナニスル構文と英語の WXDY 構文における差は、これまで分かっているものとは逆の状況、すなわち日本語が疑似目的語を認可する環境において英語ではそれが不可能な場合があることを示していると考えられる。この成果は学会、招待講演、研究会で口頭発表した。

格助詞の語中挿入を含む有標構文(2022年度)

格助詞の語中挿入(例:「最の高」)を文法的に記述し、当該現象に観察される類像性を明らかにした。この研究は当初の計画には含まれていなかったが、有標現象であるという点で本研究テーマに関係する。「最の高」を容認する話者にインタビュー調査を行った結果、次の2点が明らかになった。(i) 当該表現を伝達的場面/非伝達的場面のどちらでも使用できる話者と、専ら伝達的場面でのみ使用する話者が存在する。(ii) 即応的使用(例:美味しい食べ物を口に入れた瞬間に「最の高」と言う)と非即応的使用(例:美味しい食べ物をじっくり味わった後に「最の高」と言う)で比べた場合、非即応的使用の方が当該表現を容認しやすいと判断する話者が存在する。(i)のうち、当該表現を専ら伝達的場面で用いる話者の判断では、余分な機能語を持つ表現が、伝達的表現すなわち聞き手への伝達性を持つ表現に特化するという「複雑さ」の類像性が成立している。(ii)の判断では、相対的な迂言形式が非即応的反応を表すという「長さ」の類像性が成立している。これら2タイプの類像性は、今野(2012)やIwasaki(2006,2014)がイ落ち構文に関して指摘した「単純さ」および「短さ」の類像性と対を成す。この成果は研究会で口頭発表した。

5 . 主な発表論文等

3 . 学会等名

第11回筑波英語学若手研究会

「雑誌論文 〕 計1件(うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件)

4.巻
19
1 .
5 . 発行年
2019年
6.最初と最後の頁
262-272
査読の有無
無
国際共著
-

〔学会発表〕 計11件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)
1. 発表者名
一 今野弘章
2.発表標題
「無形の意味について - イ落ち構文の時制解釈再訪」
3.学会等名
洛中ことば倶楽部第35回例会
2023年
1.発表者名
一 今野弘章
2 . 発表標題
「イ落ち構文の時制解釈の動機付け再考」

4.発表年
2023年
1.発表者名
今野弘章
· · · · · ·
2 . 発表標題
「最の高」考
3.学会等名
第10回筑波英語学若手研究会
4 . 発表年
2022年

1.発表者名
今野弘章
2 . 発表標題
「余分な」機能語の存在と類像性
355 6.1 Mildies 17 E CAMPILE
2 4 4 7 2
3 . 学会等名
洛中ことば倶楽部第30回例会
4.発表年
2022年
1.発表者名
今野弘章
2.発表標題
構文の語用論的機能による目的語の認可
3 . 学会等名
フェラスウロ 大東文化大学語学教育研究所講演会(招待講演)
人术文化入于由于教育训九//indi/庆云(加过·朗/庆)
A NEF
4.発表年
2022年
1.発表者名
今野弘章
1.53.55
貴重な時間を何してんだ! 構文の語用論的機能によるヲ格名詞句の認可
3.学会等名
筑波大学英語学研究室言語学講演会(招待講演)
4 . 発表年
2021年
20217
a Nichard
1.発表者名
今野弘章
2 . 発表標題
横文の項としての懸垂ヲ格
2
3 . 学会等名
3 · 字云寺石 日本語文法学会第21回大会
日本語文法学会第21回大会
日本語文法学会第21回大会 4.発表年
日本語文法学会第21回大会
日本語文法学会第21回大会 4.発表年
日本語文法学会第21回大会 4.発表年
日本語文法学会第21回大会 4.発表年

1.発表者名
今野弘章
2.発表標題
Xヲナニスル構文と構文の項
3 . 学会等名
洛中ことば倶楽部第23回例会
4.発表年 2020年
1.発表者名 今野弘章
2 . 発表標題 Xヲナニスル構文における懸垂ヲ格の認可について
3.学会等名
第8回筑波英語学若手研究会 第8回筑波英語学若手研究会
2020年
1.発表者名
今野弘章
2.発表標題
「懸垂ヲ格について」
3. 学会等名
洛中ことば倶楽部第21回例会
4.発表年 2019年
1.発表者名 今野弘章
2.発表標題
2 . 光衣標題 「『余分』なヲ格項と構文の談話機能」
第7回筑波英語学若手研究会
│
2019年

ſ	図書)	計01	4

〔産業財産権〕

	册	

〔その他〕		
ホームページ		
nttps://sites.google.com/site/onnokikaou	·ih/	
6.研究組織		
氏名	6.1 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1	
(ローマ字氏名)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
(研究者番号)		

7.科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
共同顺九相于国	伯子刀叭九機馬